

6年C組	説明文で考えよう — 論理的に書くために —	友 渕 博 文
------	---------------------------	---------

## 1 単元について

### (1)国語科の授業でめざす学習文化

国語科の授業で、子どもたちが言葉を吟味しながら論理的に考えたり伝え合ったりすることができるようになることを、私は常に願ってきた。筋道立てて考え、相手に分かりやすいように伝え合う力をつけたいと考えたのである。例えば、ある語句がそこにある場合とない場合を比較して、どちらが効果的か考え、意見を述べ合うような学習が考えられる。その際、子どもたちが言葉にこだわり、細部まで検討したうえで意見を述べられていれば、力がついていると考えることにした。そこには、論理的な裏付けができているからである。

言葉を吟味して根拠を明確にし、理路整然とした話し方で活発な討論がくり広げられる。それが、私が1年間、国語科の授業でめざしてきた学習文化である。

### (2)本単元における指導の構想

本単元においては、説明文を考える材料として用い、論理的な文章を書く力を高めたいと考えた。学習指導要領の第5学年及び第6学年の目標(2)にあるように、「目的や意図に応じ、考えた事などを筋道を立てて文章に書くことができるようにするとともに、効果的に表現しようとする態度を育てる」ことをめざしたのである。

実際の指導においては、西郷竹彦氏の論考(※1)にあるように、筆者の表現の工夫や論理展開の工夫(氏はこれを「説得の論法」と呼んでいる)に目を向けさせたいと考えた。「なぜ、この段落の後にこの段落が来るのか」「筆者はいかにして読者を引きつけるように、おもしろく書いているか」と考えることによって、筆者の説得の論法を子どもたちに解明させようとしたのである。そのためには、論理展開に無理なところがなく、構成のしっかりした「何を覚えているか」(大阪書籍 4年下)を学習材として用いることが有効であると考えた。

筆者の説得の論法を学んだ後は、それを生かして実際に論理的な文章を書かせたいと考えた。本単元の最終的なねらいは、ここにあった。学習を通して、子どもたちが論理的に考え、論理的な文章を書くことができるようになることを願っていた。

※1『国語教育基本論文集成』 第15巻 国語科理解教育論(5) 説明文教材指導論Ⅱ 45 「説明文指導のめざすもの—説得の論法を中軸として—」(明治図書)

### (3)単元の目標と学習計画

#### ①目標

- 筆者の論理展開や表現の工夫を取り入れ、自分の文章に生かせるようにする。  
(書くこと オ)
- 筆者の論理展開や表現の工夫を考えながら、読むことができるようにする。  
(読むこと イ)
- 語感や言葉の使い方に注意して、文章を書くことができるようにする。  
(言語事項 ウ(エ))

## ②学習計画

第1次 筆者の説得の論法を学ぶ。

第1時 「何を覚えているか」の最後の一段落を読み、文章全体の構成を考える。

第2時 「何を覚えているか」の論理展開を検証し、書き方の工夫を知る。

第2次 筆者の説得の論法を生かして、論理的な文章を書く。

第3時 書きたい事がらを選び、構想を立てる。

第4時 構成表を書く。

第5時 下書きをする。

第6時 推敲をする。

第7時 清書をする。

第3次 自分たちの説得の論法を検証する。

第8時 自分たちが書いた文章を交流し、相互評価をする。

## 2 実践の考察

例		① 流れを作る文章
問い		② わたしたちは、最近のことや以前のことで、どのようなことをよく覚えているのでしょうか。
事		③ 最近のこと
二つ目の問い		④ 以前のこと
答え		⑤ 何度もくり返したこと
また		⑥ その気になって努力したこと
また		⑦ 強い感情に結びついたこと
また		⑧ 強い感情に結びついたこと
また		⑨ このように、わたしたちは、最近のことはもちろん、以前のことでも、何度もくり返したり、その気になって努力したり、強い感情に結びついた事から、強い感情では、よく覚えているのです。

上図は、第1時の子どもたちの考えをまとめた板書である。初めに提示された第⑨段落を手がかりにして論理的に考え、読んだことのない学習材を復元していった。子どもたちは問いの文をはじめ、題名や挙げられた事例の配列等、文章全体の構成を推測した。文章構成を完璧に推測できたわけではない。しかし、ある程度正解に近づけたことから、分かりやすい文章は、わずか一段落からでも全体像が推測できるということを感じ取ってほしかった。この時間は、着目児♠や♣が積極的に取り組んだ。特に♠は、問いの文や題名を考える際に、進んで意見を述べた。♡は問いの文作りで、正解を出していた。この子どもの考えを、もっと授業に生かすべきであったと反省している。

第2時では、この学習材のどのようなところに筆者の表現の工夫がなされているかを話し合った。子どもたちから出された考えは、次のようであった。「身近な事例が分かりやすい」「いくつかの段落内で『このように』と、まとめている」「二つ目の問いがある」

第3時以降は、前時までの学習を生かして、実際に自分たちも論理的な文章を書いてみることにした。選材、構成、下書き、推敲、清書を、それぞれ1時間ずつかけて行った。

選材の前日、題材をいくつか考えておくように指示した。その際、例として「兄弟の性格」や「〇〇のし方」などが考えられると紹介した。結果、ほとんどの子どもが自分の兄弟姉妹や友達の性格を題材として選んだ。あまりに安易すぎる例を出したかと、反省した。

構成のときは、まず初めに問いの文と答えの文を作り、それらが完全に対応するかどうかの検討から始めた。その後、事例を挙げ、段落の配置を考えながら構成表を完成させた。

文章の構成が決まれば、下書き、推敲、清書は、スムーズに行うことができた。

では、完成した子どもたちの作品から、本単元での実践を検証してみたい（着目児は、全員が「～の性格」という題材を選んでいて、ここでは♡の作品を例として挙げる）。

#### 【作品例1】 よく分からない妹

私の妹は今、十歳で名前は彩加といって、四年生です。

そんな妹の性格は、どのようなものなのでしょう。

まず、妹はこういうやさしい所があります。私が上の階にいて、下の階にある物を取りたいとき、妹に「〇〇取ってきて。」と言ったら取ってきてくれます。又、使いたい物があるけれど自分が持っていない場合、妹は貸してくれます。

二つ目に、私が宿題をやっているとき、妹はしゃべりかけたり、じゃまをしたり、エレクトーンをひいたりしません。それと、妹がまだ宿題をしていないとき、「宿題やりなよ。」と言ったら、反抗せずにします。私は、妹のそういう所がいいと思います。

しかし、いやな所もあります。妹が宿題をやっていて、私に聞いてきます。「もう少し考えなよ。」と私は言うのですが、それでも分からないときや、教えていても意味が分からないとき、やけくそになって鉛筆や消しゴムを投げてきます。それは危ないのていやです。

二つ目もまた同じような事なのですが、妹が宿題をやっていて分からないとき、私も宿題をやっていて教えてもらえないので、「もう少し考えなよ。」と言ったらにらんできます。それは、怖いのでいやです。私はこのようなことがいやです。

このように、妹はやさしい所といやな所と二つあります。そして、いやな方が多いですが、たまにとてもよいときもある、よく分からない性格です。

#### 【作品例2】 麻酔薬の発明

華岡青洲は、世界で初めて麻酔薬を使って手術をし、今まで治らないとされていた難病を治し、医学に一生をささげた人です。

では、どうやって青洲は麻酔薬を完成させたのでしょうか。

華岡家は代々お医者さんで、村人たちの病気やけがを治してきました。父は主に外科を専門とするお医者さんでした。青洲は、死んでいく人をたくさん見ました。そして、いつの頃からか、「早く立派な医者になって、病気を治したい」と思うようになりました。

麻酔薬を完成させるには、人間を使って人体実験をしなければなりません。そのことに気づいていた母と妻は、麻酔薬を飲んであげると言いました。この人体実験ができなかったら、麻酔薬は完成できなかったと言えます。

しかし、麻酔薬には副作用がありました。麻酔薬の効果を強くして、副作用を弱くするのが青洲の課題でした。

何百回も実験をし、副作用が弱くなりました。青洲は25年かかって麻酔薬を完成させました。医学の進歩と言えます。

#### 【作品例3】 犬の性格はどのようなものか

犬には、それぞれにいろんな性格があります。優しい性格、やんちゃな性格など、たくさんです。

では、大きさ別に言うと、一体主にどのような性格なのでしょう。

小型犬の場合だと、主に気が強いです。特に、チワワなどは大型犬の前でもものおじせず、とても気が強いです。

では、どうして小型犬は気が強いのでしょうか。

自分が弱いと分かっているのに、認めたくないというのが、主な理由と言えるでしょう。自分が弱いと分かっているのに周りの者に勝ちたい、自分は弱くないということを、周りにアピールしているのでしょう。

では、大型犬の場合はどうなのでしょう。

大型犬は主に、気が優しいということです。その理由は、自分が大きくて強いということが分かっているからだと言えるでしょう。自分は大きくて強いから、周りの者にほえたりしなくてもいいと思っている

のしょうから、大型犬は気が優しいと言えるでしょう。

しかし、しつけによって、大型犬の気が強くなったり、小型犬が優しくなったりもします。その他に、神経質、人見知り、おこりっぽくなったり、おくびょうになったりもします。それは、飼い主が犬を甘やかすすぎたり、厳しくしすぎたりすることからきています。

このように、小型犬は気が強く、大型犬は気が優しいです。また、しつけによって大型犬の気が強くなったり、小型犬の気が優しくなったり、しつけ次第で変わることもあります。

作品例1は、♡の書いたものである。問いの文と答えの文（段落）が一致している。しかし、事例が同じようなことのくり返しになってしまっていて、くどいと思われる部分もある。♡は、構成表の段階では論理展開に無駄な部分は見受けられなかったのであるが、下書きの段階で考えを修正したようである。

作品例2は、ある男児の作品である。総合的な学習で研究した郷土の偉人、華岡青洲が麻酔薬を完成したことを題材としている。答えの文に「このように」という言葉がないこと、副作用の軽減についての記述が少ないことが気にはなるが、文章の構成はうまくできている。

作品例3は、筆者の説得の論法をよく生かしている作品の一つである。本文中に問いの文が三つ出てくる。こうして問いかけることには、読者の気を引く効果がある。しかも、問いの文に対する答えは、それぞれうまく対応している。非常に分かりやすい文章であると言える。

これら作品例の分析から、説明文を学習材として論理的に考えることは、論理的な文章を書くことに有効に働くということができる。

### 3 今後の課題と展望

本単元の実践で、優れた説明文は、子どもたちが論理的な文章を書く際のモデルとなり得ることが分かった。問いと答えの文の対応、事例の効果的な挙げ方等、筆者の説得の論法を生かして書くことは、子どもたちの書く力を高めるために有効な方法であると考えられる。

本単元では、学習材は「読む」ためのものではなく、あくまで筆者の説得の論法を学ぶためのものであった。つまり、書くことが本単元のねらいであったのである。そこに欠けていたものは、読むことと書くこと、すなわち理解と表現の連携である。

今後は、今まで以上に読むことと書くことを連携させた説明文指導が求められると考えている。その学年で読むにふさわしい内容、程度の文章の読解と論理的な表現を表裏一体とした指導法の開発が必要である。

### 4 実践研究テーマの設定

今年度の実践をふり振り返り、以下のように来年度の実践研究テーマを設定する。

#### 「論理的に読むことを論理的に書くことに生かす説明文の指導法について」

今年度は、説明文教材を用いて論理的思考力を鍛えることを目標にして、実践研究に取り組んできた。それは、読むことを中心としたものが多かった。しかし、本実践を一つの契機として、「論理的に書く」ことの研究にも手を広げていきたいと考えるようになった。

論理的思考力を働かせながら説明文を読み、筆者の表現や論理展開の工夫を、まず学ばせたい。そして、それを生かして論理的な文章を書くことにつなげるような指導法を研究していきたいと考える。同時に、そのような指導のために有効な学習材の開発も心がけていかなければならない。